

DXで山形の未来を拓く



DX導入のイメージを膨らませる動画の紹介やDXツールを体験できる「MECOM DX Center」オープン。安部社長（左）と今後の展開について話し合うスタッフ

（株）メコム（安部弘行代表取締役社長）は、東北芸術工科大学と共同で、山形の企業がリアルなDX（デジタルトランスフォーメーション）を体験できる「MECOM DX Center」をオープンした。

「山形の未来が抱える社会問題をDXで解決したい」「山形の企業経営者と共に成長していきたい」と語る安部社長に開設の思いを聞いた。

—開設に至った背景についてうかがいます。

安部社長 少子高齢化、若年層の流出、医療問題・産業の活性化など、山形が抱える社会問題は多い。情報サービス大手リクルート研究機関によりますと、いわゆる団塊ジュニアの世代が65歳以上の2040年には、山形県の担い手不足は32・1%と予測され、全国でも6番目に高い数値となっています。人口減少も加速しており、本県においては毎年1万人以上減り続け、20年後には80万人台となりかねない状況です。実際、当社のお客様から「業況は

持ち直しつつあるが、人材不足が最大の悩みだ」「社員の負担を減らすために何か良い方法はないか」といった悩みや不安が数多く寄せられています。

—東北芸工大と共同でプロジェクトに取り組んだ狙いは

安部社長 山形の未来を考える上で、未来の担い手である若者の声が絶対に必要でした。彼らは幼い頃からデジタルに慣れ親しんできた世代です。その感覚は私たち世代にはないものです。プロジェクトメンバーの1人で、2年前に東京からUターンし入社した安部晃史郎DX推進ユニットデジタル戦略室マネージャーが「山形に戻ってきたくなる未来を創るためには、他県よりも導入が遅れているDXを通して社会問題を解決していく必要がある」と発案。東北芸工大企画構想学科の関良樹教授のゼミとプロダクトデザイン学科の渡邊吉太准教授ゼミに協力を依頼し、企画・コンセプト・インテリア・内装などセンターは「若者だか

株式会社メコム

創業 1946（昭和21）年
代表 安部弘行代表取締役社長
本社 山形市香澄町2丁目9番21号

電話 (023) 622-8673
FAX (023) 628-1828

DXセンターオープンを記念して関教授の記念講演が行われ多くの企業人が聴取した(写真左)。会場の山形テルサロビーで25社が参加した展示会(同右)



DX、チャットGPT活用のススメ

関良樹東北芸術工科大学教授

「MECOM DX Center」オープンを記念したフォーラムが7月4日開催され、関良樹教授(写真)が「山形の未来を想像できるか?」と題して、広告代理店営業職・プランナー、ITビジネス、コンサルティングなど豊富な経験をもとに講演。「DX推進は地域の持続可能性や活性化に大いに貢献する可能性がある」と強調した。



関教授は「地方においては縮小傾向のマーケットに加えて人手不足は避けられない。既存業務の棚卸(見直し)が喫緊の課題であり、DXを導入し業務の改善・効率化、さらには事業の新たな価値を創造することが生き残り戦略に不可欠」と指摘。「分かっているけれど何をやればいいのかわからない」といった声に応え▼スマホを活用した業務DX(QRコード左)▼物流企業が採用したDX(QRコード右)の2つの事例を動画で紹介した。さらに、「チャットGPT」など対話型生成AI(人工知能)について、会議資料作成を例示し「使いこなすことで業務の質を高め、より高度な業務へシフトする」と述べ社内でも活用することを勧めた。



「こそ」のアイデアが詰まっています。

—「DXの拠点」を目指すセンターの特徴は

安部社長 3つの特徴があります。1つは「製品からDX化への提案ではなく、お客様の課題や困りごとを切り口にした提案です」。企業それぞれが抱える状況に寄り添い、相談を頂いた企業に最適なDXプランを一緒に考えていきます。

2つ目は「DXツールをデモ体験できる」ということです。DXツールすべてを理解することは難しく、DX導入を検討している企業からも

「イメージがしにくい」といった声が聞かれます。「実際に使ってから判断したい」という声も少なくありません。センターでは例えば、省力化・省エネ化、ペーパーレス化・電子帳簿保存法、リモートワーク・働き方改革、販売力強化といった課題をデモを通じて体験し、将来のデジタル経営に備えることができます。

3つ目は「もつとDXをシンプルに考える」という提案です。センターは、山形のこれからのDXの力でビジネスを通じ、県民の豊かな生活を願う場でありたいと考えています。「知恵」を生み出し、社会が求める「共生」の場所になることが理想で

す。そのためには「複雑そう、難しそう」といったイメージのあるDXの障壁を低くしなければなりません。

そこで「DX×Creative」を空間のコンセプトに掲げ、東北芸工大プログラムデザイン学科の学生たちの協力のもと、分かりやすいピクトグラム表記や社会問題を解決するコンセプションな作品も併せて展示しています。さらに、関教授を座長に「山形ChatGPT研究会」を立ち上げ、AIを実装する社会、企業を目指します。こうした柔らかな雰囲気の中で、将来の山形について企業同士が語り合う場としても活用されることを願います。